

## 昭和六十三年度 特別研修員研究発表要旨

## 清沢満之における分限の自覚について

瀧 弘 信

明治三十四年以降、雑誌『精神界』等に表明された清沢満之の精神主義の信念は、「分限の自覚」という語でその特徴が語られるのだが、その自覚は満之自身によって、

我等の大迷は如来を知らざるにあり。如来を知れば、始めて我等に分限あることを知る。乃ち、我等の如意なるものと、如意ならざるものとあるは、この分限内のもとは分限外のものとなるが為也。然るに、我等は始めより何が分限内のもにして、何が分限外のものたるやを知らず。此によりて、苦楽の感情なるものあり。苦は分限外のものに附随するより起り、楽は分限内のもに從属するより起る。(『当用日記』)と、記されている。

満之はこの知見を、三十一年九月に沢柳政太郎宅で目にした『エピクテタス語録』との邂逅を通して獲得したのであるが、私はこの「分限の自覚」とは、親鸞における宿業の自覚の近代における再展開である、と考える。満之自身、「余の三部経」と称して『歎異抄』『阿含経』『エピクテタス語録』を座右としたのであるが、『エピクテタス語録』に現われた如意なるものと不如意なるものとの弁を思想的触媒として、『歎異抄』の語る機の深信としての宿業の自覚を分限の自覚として獲得し、その信念を広く世

に問うたものが、満之晩年の精神主義だったのではないか。

この如意不如意の弁別は、往々にして自分の能力及ぶ範囲の内外の規定と捉えられ、分限の自覚は、その範囲外のものへの無批判の首肯、受容、もしくは從属、アキラメを勧めるものと理解される。しかし、そのような理解は果たして正鵠を射たものだろうか。この理解そのものに、すでに満之の示唆した、如来を知らぬ「大迷」が潜んでいるのではないか。満之によって弁別されたものがそれぞれ何であり、その弁別が何によって成り立ち、人間にどのような境地をもたらすのか、改めて考察する必要がある。

満之における如意なるものとは「自己」もしくはその「意念」であり、不如意なるものは「身、財、名、爵(名利、爵禄、死生、疾病)」等の「自己」ならざるもの、すなわち「外物」である。エピクテタスの語る「意念」とは人間の自由意思であるが、満之においては、そのような自由意思、すなわち「現前一念の心の起滅」をも含めた境遇全体が、自己の所作の範囲外、不如意である。満之は内観、自己省察を通して、「真に自己なるもの」を、

曰く天道を知るの心、是れ自己なり。天道を知るの心を知るの心、是れ自己なり。天道と自己の關係を見して、自家充足を知るの心、是れ自己なり。自家充足を知りて、天命に順じ、天恩に報ずるの心、是れ自己なり。(『臘扇記』)

と捉えた。この、天道を知見して自家に充足し、外物他人に傷害されない心、現前の境遇、「自分の稟受」を「天与の分」「天命の表顯」と諦観する主体をこそ、満之は「自己」「意念」もしくは「精神」と呼んだのである。

そして、人間をして自分に充足せしめないもの、外物他人の動作に反応して生じる服従、傷害、煩悶憂苦等の感覺は、本来無関

係、同等の自分と外物他人の間に優劣、服従被服従等の解釈を加えてその解釈自体に固執するという、人間の妄念妄想の所産であつて、自分は外他の人物の動作にはなく、動作に対する自分の解釈、意見にこそ苦しめられるのだ、と看破したのである。

満之において分限とは、自己の所作、能力の及ぶ範囲ではなく、「有限無限の分限」であり、現前の境遇全体が不如意なる相対有限であつて、それを「絶対無限の付与」と頷くことにおいてのみ、不自由の中に自由の心境を得るといふ、自覚の内容なのである。

しかし、こう自覚した満之は、多田鼎が、

(現実の自分は、)正しく自分自身の業の所産であつて、神の創造でもなく、天の分体でもない。(中略)師の所謂如来は、西洋の近世哲学者の神であり、又天命であつて、阿弥陀仏ではない。(清沢満之師の生涯及び地位)

と、後世批判するように、天、命、絶対無限、如来、他力をしばしば、自己の生死を含んだ全宇宙の生滅変化を司る造物主、神の同義語として用いる。そのような如来観を内容とした満之の自覚が、何故宿業の自覚と同質だと言えるのだろうか。

満之において天与と頷かれた「自分の稟受」とは、確かに、多田鼎の説く如く、不如意きわまりない業報の現実であり、それをいたずらに天命と安んじ、感謝せよと言うのであれば、如来の救済(の論理)に酔う、いわゆる「恩寵主義」に他ならない。しかし、そのような「恩寵主義」に安住し得ない者は他ならぬ満之自身であり、最晩年の無責任主義、殊に絶筆「わが信念」に至つては、義務責任に悩む満之の「一切の責任を引き受けて下さる」如来と、精神主義(分限の自覚)と恩寵主義(性情放任)とを峻別する、「ただ自己の罪惡と無能とを懺悔して、如来の御前にひれ

ふす」といふ、自力無功の懺悔とが語られている。

絶対無限の如来に対する相対有限の衆生の回心懺悔。この懺悔において、我執の解釈による業報の現在の意味(失敗、責任、罪惡)への固執と、それに伴う苦業の感情を離れることが成り立つのである。満之はその光景を、

精神主義はかくのごとき場合にあたりて、一方には快樂苦痛の主觀的現象なることを寛りて、その轉換の自由あることを知らしめ、一方には事の成績については、無限大悲の善巧方便あることを諒とし、その良否ともに意味あることを領せしむ。すなわち放心と傷惱とは自然に消散し去りて、いわゆる驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等の弊賣、また生起せざるに至る。

と語る。(精神主義と三世)

満之は分限の自覚を「天命に安んじて人事を尽くす」と端的に表白したが、そこに言う「天命」とは、ここに至つて、「責任の煩惱」に喘ぐ衆生を懺悔せしめ、その宿業の全責任を荷負して、衆生を宿業の繫縛から解き放つて現前の境遇に「落在」せしめる「無限大悲の如来」、すなわち衆生の行信の自覚内容としての無礙光如来の意味を有するのである。

このような「如来を信ずる」信念において、宿業の限定の中で宿業を障りとするものない、人間の絶対自由が成り立つ。私はそこに、無礙光の利益によつて悪業の障りを離れた親鸞の、「一念仏者は無礙の一道なり」との表白と響き合うものを感じる。如来観に関しては未完成の誇りを免れないながらも、満之が直覺的に探り当てた「わが信念」、分限の自覚とは、確かに、親鸞の宿業の自覚の等流であつたと言えよう。